

南琉球宮古伊良部島方言の係り結び：共時的な記述

下地，理則

<https://hdl.handle.net/2324/7342420>

出版情報：琉球の方言．33，pp.87-98，2009-03-31．法政大学沖縄文化研究所
バージョン：
権利関係：



南琉球宮古伊良部島方言の係り結び―共時的な記述

下 地 理 則

1. はじめに

本稿では、南琉球宮古伊良部島方言（以下、伊良部島方言）の係り結びについて、その共時的な記述を行う。琉球語諸方言の係り結びに関してはこれまでに多くの研究が存在するが、本稿で扱う伊良部島方言の係り結びに関してはまとまった記述がほとんどない。しかも後述するように、この方言の係り結びは宮古方言の係り結びの中でもとりわけ複雑であり、共時的にも通時的にも重要なデータとなる。

宮古方言の係り結びについては複数の重要な論考（柴田 1976、内間 1985、名嘉真 1992、狩俣 1997）が存在し、その概要が明らかにされつつある。琉球語全体の係り結びの特徴をまとめている内間（1985）の記述に従えば、宮古方言の係り結びの全体的な特徴は以下のものであるという。

- (1) 先島（宮古・八重山・与那国）には *du* 係り助詞が存在する。
- (2) 活用は連用、終止、連体とあるが、それらは同形（以下、本稿では便宜的に「絶対形」）であり、すべて国語の連用形に対応する。これに加えて、*m* 語尾終止形が存在する。結びは普通絶対形を用いるが、それ以外の活用も結びになりうる。
 - a. 絶対形：*kakž* 「書き」「書く。」「書く（もの）」
 - b. *m* 語尾終止形：*kakžm* 「書く。」
 - c. その他の活用形：*kakadi* 「書こう」など
- (3) 先島の係り結びは特定の結び形式との呼応を見せず、「係りの弱まり」が目立つ。

本稿では伊良部島方言を対象に、上記の宮古方言の係り結びの特徴に照らして記述を行い、伊良部島方言の特徴的な点を提示する。伊良部島方言は、上記の (1) から (3) に関して以下のような特徴を持っている。

- (1') 伊良部島方言には *du* 係り助詞、*ru* 係り助詞、*ga* 係り助詞があり、それぞれ平叙文、Yes-No 疑問文、Wh 疑問文において使われる。
- (2') 活用は、連用形、連体終止形、*m* 語尾終止形、その他の活用が存在するが、連用形は語形というよりも語幹の形である。これを除く 3 形式が動詞語形として対立する。これら 3 形式に関して、係り結びにおける結びの制限は「*m* 語尾終止形で

結べないこと」である。

- a. 連用形：*kaci-*「書き」（単独では使用せず）
- b. 連体終止形：*kafi*「書く。」「書く（もの）」
- c. *m* 語尾終止形：*kafim*「書く。」
- d. その他の活用形：*kakadi*「書こう」など

- (3') 伊良部島方言の係り結びは従って内間の指摘する「特定の結びと呼応しない」（「係りの弱まり」）という指摘に合致するが、ほかの宮古方言に比べると明確な制限が見られる。古代日本語のように特定の結びを要求する係り結びを「一致型の係り結び」とすると、伊良部島方言の係り結びは特定の結び（*m* 語尾終止形）を排除する「排除型の係り結び」である。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節において動詞形態論の概要を示す。3節において上記（1'）と（2'）を記述する。4節では、*m* 語尾終止形で結べない制限について、この形式のムードの観点から議論する。5節で結論を示す。

2. 伊良部島方言の動詞形態論概観

本節では伊良部島方言の係り結びの記述に必要な動詞形態論に関する予備記述を行う。

2.1. 語形変化（屈折）

語形変化は語幹がさまざまな語尾を取りかえてさまざまな語形を形成することである（下地 2008）。伊良部島方言の動詞の語形変化は動詞の統語機能によって2つのクラスに区分される。本稿で問題にするのは定動詞である。準動詞の形態論的な詳細・統語的な機能については下地（2008）を参照されたい。

- (4) a. 定動詞：主節の述語として文を終止しうる形式類
b. 準動詞：従属節の述語となる形式類（副動詞、中止形）

形態論的に見ると定動詞はテンス・ムードを屈折カテゴリーとして持つが、準動詞はこれらを持たない。以下に母音語幹動詞 *mii-*「見る」と子音語幹動詞 *kak-*「書く」を例に、定動詞の屈折体系を示す。子音語幹動詞は、語幹拡張辞（*-a* 拡張辞と *-i* 拡張辞：グロス は THM）が一定の屈折語尾を取る際に生じる。こうした語幹の変化（「未然」「連用」など）の詳細、および形態音韻論の詳細は紙数の都合上本稿では扱わない。この点を中心に記述している下地（2008）を参照されたい。また以下では、内間の記述と対照しやすいように下地（2008）と用語を変えている。本稿では下地（2008）の「直説法」を *m* 語

尾終止形、「接続法」を連体終止形と呼ぶことにする。

(5) 定動詞の語形変化¹

	母音語幹動詞	<i>mii-</i> 「見る」	子音語幹動詞	<i>kak-</i> 「書く」
	過去	非過去	過去	非過去
<i>m</i> 語尾終止形	<i>mii-tam</i>	<i>mii-rm</i>	<i>kafi-tam</i>	<i>kafi-m</i>
連体終止形	<i>mii-tar</i>	<i>mii-r</i>	<i>kafi-tar</i>	<i>kafi-Ø</i>
希求推量形 意志「しよう」		<i>mii-di</i>		<i>kak-a-di</i>
希求「したい」		<i>mii-baa</i>		<i>kak-a-baa</i>
命令「しろ」		<i>mii-ru</i>		<i>kak-i-Ø</i>
禁止「するな」		<i>mii-rna</i>		<i>kafi-na</i>

2.2. 連用形

伊良部島方言の連用形（に対応する形式）は拘束語幹であって、それ自体では自立語として機能しない。下地（2006、2008）が指摘するように、伊良部島方言の連用形は主に動詞語根から名詞語幹を作る際に使われ、特に複合名詞の語幹として多用される²。複合名詞（A+B）においては、主要部名詞語幹 B を修飾する語幹 A もまた名詞語幹（あるいは名詞に準じる形容詞語幹）でなければならず、動詞語幹 A を名詞語幹 B にそのまま複合することは出来ない。この場合、動詞語幹 A を連用形にする。また、複合名詞の主要部 B に連用形がたつこともできる。

(6) *kak-*「書く」 > *kac(i)-*「書き」（連用形）

- a. *kaci+kata* 「書き方」
- b. *munu+kaci* 「もの書き」

(7) *jum-*「読む」 > *jum-*「読み」（連用形）

- a. *jum+kata* 「読み方」
- b. *munu+jum* 「もの読み」（読書）

(8) *mii-*「見る」 > *mii-*「見」（連用形）

- a. *mii+kata* 「見方」
- b. *munu+mii* 「もの見」（見物）

日本語の連用形の重要な機能である中止（例「本を読み、」）については、準動詞（中止形）が使われ、連用形がそのまま使われることはほとんどない。

- (9) *hon=na jum-i-i, sim=mu narav-Ø.*
 本=ACC2 読む-THM-中止 墨=ACC2 習う-NPST. 連体
 「本を読み、勉強をする (lit. 墨を習う)」

よって本稿では連用形を語形変化の体系には含めない。伊良部島方言の連用形は派生形態論で扱うものであり、語形変化（屈折形態論）とは別に考えなければならない。伊良部島方言の連用形と他の宮古諸方言の絶対形との違いはここにある。絶対形は自立語であり、それ自体で動詞として機能するので、動詞の語形変化の1形式としなければならない。

2.3. 定動詞の統語機能

文を終止できる形式類である定動詞のうち、*m* 語尾終止形と希求推量形のほとんどの形式は文終止の機能のみを持つが、意志形だけは等位節の述語にもなりうる（(13) 参照）。連体終止形は文終止 (14) に加えて連体修飾の機能 (15)、補文の述語の機能 (16) を持つ。ただし、補文の機能は限られており、多くは補文標識の *=su(u)*（異形態 *=ru(u)*）を用いる (17)。この場合も、動詞は連体終止形である。これは *=su(u)* がもともと連体修飾節の主要部名詞「もの；人」だったことによる（Shinzato *forthcoming*）。

- (10) *ba=a budur=ru mii-tam.*
 1SG=TOP 踊り=ACC 見る-PST. 終止
 「私は踊りを見た。」
- (11) *ba=a budur=ru mii-baa.*
 1SG=TOP 踊り=ACC 見る-NPST. 希求
 「私は踊りを見たい。」
- (12) *ba=a budur=ru mii-di.*
 1SG=TOP 踊り=ACC 見る-NPST. 意志
 「私は踊りを見よう。」
- (13) *ba=a budur=ru mii-di=ssiba, vva=a saci=n ngi-ru.*
 1SG=TOP 踊り=ACC 見る-NPST. 希求=ので 2SG=TOP 先=DAT 帰る-NPST. 命令
 「私は踊りを見る（ことにする）ので、お前は先に帰なさい。」
- (14) *ba=a budur=ru mii-tar.*
 1SG=TOP 踊り=ACC 見る-PST. 連体
 「私は踊りを見た。」

- (15) *budur=ru mii-tar pžž=a ici=ga a-tar=ga?*
踊り=ACC 見る-PST. 連体 日=TOP いつ=FOC COP-PST. 連体=Q
「踊りを見た日はいつだったか？」
- (16) *budur=ru mii-tar=ru=baa bassi-i njaa-n.*
踊り=ACC 見る-PST. 連体=ACC=TOP 忘れる-中止 PRF-NPST. 連体
「踊りを見た（こと）は忘れてしまった。」
- (17) *budur=ru mii-tar=ruu=ju=baa bassi-i njaa-n*
踊り=ACC 見る-PST. 連体=CMP=ACC=TOP 忘れる-中止 PRF-NPST. 連体
「踊りを見たことは忘れてしまった。」

3. 係り結び

本節では、伊良部島方言の係り結びの共時的な記述を示す。以下、§1で示した(1')と(2')を順に明らかにしていく。

3.1. 焦点標識

以下の(18)に見るように、伊良部島方言の焦点標識の出現の有無・種類は平叙文、Yes-No疑問文、Wh疑問文、命令文の4つの基本的な構文タイプによって異なり、宮古方言の中でも複雑な様相を示す³。なお、疑問文における焦点標識は、焦点化されている名詞句以外に、文末にも焦点標識と同音の形式がコピーされることがある。このコピー形式は、後述するように焦点標識と異なる形態音韻論的な振る舞いをし、少なくとも共時的には別形態素の疑問標識と分析できる（以下の例で=Qとグロス）。なお、(20b)に例示されるように、Yes-No疑問文で行為の成立を問う場合は、疑問標識=*ru*が文末にのみ出現する。

(18) 伊良部島方言の焦点標識

	焦点標識	備考
平叙文	= <i>du</i>	
Yes-No疑問文	= <i>ru</i>	文末に= <i>ru</i> と同音形式の疑問標識が出現可能
Wh疑問文	= <i>ga</i>	文末に= <i>ga</i> と同音形式の疑問標識が出現可能
命令文	なし	

(19) 平叙文

pžsara=nkai=du ik-i-i t-tar.
平良=へ=FOC 行く-THM-中止形 来る-NPST. 連体

「平良へ行ってきた。」

(20) Yes-No疑問文

- a. *pžsara=nkai=ru ik-i-i t-tar(=ru)?*
 平良=へ 行く-THM-中止形 来る-NPST. 連体(=Q)
 「(e. g. 沖縄じゃなくて) 平良へ行ってきたの？」
- b. *pžsara=nkai ik-i-i t-tar=ru?*
 平良=へ 行く-THM-中止形 来る-NPST. 連体=Q
 「平良へ行ってきたの？」

(21) Wh 疑問文

- nza=nkai=ga ik-i-i t-tar(=ga)?*
 どこ=へ=FOC 行く-THM-中止形 来る-NPST. 連体(=Q)
 「どこへ行ってきたの？」

(22) 命令文

- pžsara=nkai(*=du) ik-i-i kuu.*
 平良=へ(*=FOC) 行く-THM-中止形 来る-NPST. 命令
 「平良へ行ってこい。」

すでに述べたように、焦点標識の=*ru*と疑問標識の=*ru*には形態音韻論的な振る舞いの違いがある。(23)に見るように、疑問標識の=*ru*は鼻音終わりの述語に接続すると/*r/*が鼻音に同化するが、(24)に見るように、焦点標識の=*ru*は鼻音終わりの名詞句に接続しても同化しない。

- (23) a. *vva=a ik-a-di=ru?*
 2SG=TOP 行く-THM-NPST. 推量=Q
 「お前は行くのか？」
- b. *vva=a ik-a-djaan=nu?*
 2SG=TOP 行く-THM-NEG. NPST. 推量=Q
 「お前は行かないのか？」
- c. *vva=a ifi-m=mu?*
 2SG=TOP 行く-NPST. 終止=Q
 「お前は（今まさに）行くのか？」
- (24) a. *uri=a žžu=ru a-tar=ru?*
 3SG=TOP 魚=FOC COP-PST. 連体=Q
 「それは魚だったのか？」

- b. *uri=a* *kan=ru* *a-tar=ru?*
 3SG=TOP カニ=FOC COP-PST. 連体=Q
 「それはカニだったのか？」
- c. *uri=a* *am=ru* *a-tar=ru?*
 3SG=TOP 網=FOC COP-PST. 連体=Q
 「それは網だったのか？」

3.2. 結びの形

2節で見たように、定動詞の語形変化の体系は過去において *m* 語尾終止形と連体終止形の2項対立を示し、非過去において *m* 語尾終止形、連体終止形、希求推量形の3項対立を示す。焦点標識が出現すると、過去においては連体終止形が選択され、非過去においては連体終止形ないし希求推量形式（命令を除く）が選択される。すなわち、*m* 語尾終止形が排除される。

(25) 平叙文：過去

- a. *agu=u=du* *jurav-tar.*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-PST. 連体
 「友人を呼んだ。」【連体終止形】
- b. **agu=u=du* *jurav-tam.*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-PST. 終止
 「友人を呼んだ。」【*m* 語尾終止形】

(26) 平叙文：非過去

- a. *agu=u=du* *jurav-Ø.*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-NPST. 連体
 「友人を呼ぶ。」【連体終止形】
- b. **agu=u=du* *jurav-m.*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-NPST. 終止
 「友人を呼ぶ。」【*m* 語尾終止形】
- c. *agu=u=du* *jurab-a-di.*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-THM-NPST. 意志
 「友人を呼ぼう。」【希求推量形：意志】
- d. *agu=u=du* *jurab-a-baa.*
 友人=ACC=FOC 呼ぶ-THM-NPST. 希求
 「友人を呼びたいなあ。」【希求推量形：希求】

(27)、(28) は Yes-No 疑問文である。(27) に示されるように、過去時制において焦点標識 *=ru* が出現すると連体終止形が選択される。(28) では、非過去時制において *m* 語尾終止形以外の形式と *=ru* が共起可能であることが示されている。ただし、希求法は疑問化できないため、例文に含めていない。

(27) Yes-No 疑問文：過去

- a. *agu=u=ru jurav-tar(=ru)*.
 友=ACC=FOC 呼ぶ-PST. 連体 (=Q)
 「友人を呼んだの？」【連体終止形】
- b. **agu=u=ru jurav-tam(=mu)*.
 友=ACC=FOC 呼ぶ-PST. 終止 (=Q)
 「友人を呼んだの？」【*m* 語尾終止形】

(28) Yes-No 疑問文：非過去

- a. *agu=u=ru jurav-Ø(=ru)?*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-NPST. 連体 (=Q)
 「友人を呼ぶの？」【連体終止形】
- b. **agu=u=ru jurav-m(=mu)?*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-NPST. 終止 (=Q)
 「友人を呼ぶの？」【*m* 語尾終止形】
- c. *agu=u=ru jurab-a-di(=ru)?*
 友=ACC=FOC 呼ぶ-THM-NPST. 意志
 「友人を呼ぶ（つもりな）の？」【希求推量形：意志】

(29)、(30) は Wh 疑問文である。(29) に示されるように、過去時制において焦点標識 *=ga* が出現すると連体終止形が選択される。(30) では、非過去時制において *m* 語尾終止形以外の形式と *=ga* が共起可能であることが示されている。ただし、希求法は疑問化できないため、例文に含めていない。

(29) Wh 疑問文：過去

- a. *taru=u=ga jurav-tar(=ga)*.
 誰=ACC=FOC 呼ぶ-PST. 連体 (=Q)
 「友人を呼んだの？」【連体形】
- b. **taru=u=ga jurav-tam(=ga)*.
 誰=ACC=FOC 呼ぶ-PST. 終止 (=Q)

「友人を呼んだの？」【終止形】

(30) Wh疑問文：非過去

a. *taru=u=ga jurav-Ø(=ga)?*

誰=ACC=FOC 呼ぶ-NPST. 連体(=Q)

「誰を呼ぶの？」【連体形】

b. **taru=u=ga jurav-m(=ga)?*

誰=ACC=FOC 呼ぶ-NPST. 終止(=Q)

「誰を呼ぶの？」【終止形】

c. *taru=u=ga jurab-a-di(=ga)?*

誰=ACC=FOC 呼ぶ-THM-NPST. 意志(=Q)

「誰を呼ぶ（つもりな）の？」【希求推量形：意志】

4. *m* 語尾終止形で結べないのはなぜか

3節までで明らかになったように、伊良部島方言の係り結びは必ずしも連体終止形で結ぶ必要がなく、内間が指摘する「係りの弱まり」が見られる。ところが、これまでに報告されている他の宮古諸方言の係り結び（e. g. 狩俣 1997）と異なり、特定の語尾（*m* 語尾終止形）を排除するという強い制限がある。こうした「排除型の係り結び」は、連体形あるいは已然形を要求する古代日本語の「一致型の係り結び」とも異なり、一方他の宮古諸方言のように結びが係助詞に呼応しない「非呼応型の係り結び」とも異なる。

こうした「排除型の係り結び」が生じるのはなぜだろうか？すなわち、なぜ *m* 語尾終止形が係り結びの結び形式として出現できないのだろうか？下地（2008）において筆者は *m* 語尾終止形のムードの記述を行ったが、そこで主張したのは以下の2点である。

(31) *m* 語尾終止形は、命題の真・偽への話者の確信を標示する。

(32) *m* 語尾終止形は、聞き手が誤った前提を持っている場合に正しい情報を教える場合や、そもそも聞き手が無自覚の情報を伝える場合にのみ使われる。

ここで注目したいのが (32) の談話的特徴である。*m* 語尾終止形は、新情報を伝える場合にしか使われないということである。例えば以下の2例それぞれにおいて、話者は命題内容の成立に確信があり、かつその成立について全く自覚がない聞き手にそれを伝えている。

(33) *ukuu+uku=nu nam=nu fïï-m=mju.*

RED+大きい=GEN 波=NOM 来る-NPST. 終止=よ

「大波が来るんだよ！」

- (34) 【文脈：聞き手の側で花瓶が落ちそうになっているが聞き手は気づかない】

hai! uti-rm=dooi.

おい 落ちる-NPST. 終止=よ

「おい、落ちるよ！」

聞き手にとって新情報である場合とは、聞き手が伝達内容を知らない場合だけでなく、伝達内容の真偽にたいして誤った前提を持っている場合でもある。以下の (35) はこの場合を表している。

- (35) A. *kuri=a nau=mai s-sa-n.*

3SG=TOP なに=も 知る-THM-NEG. NPST. 連体

「こいつは何も知らないよ。」

- B. *gui! kuri=a nau=ju=mai s-si+u-m.*

なに 3SG=TOP 何=ACC=も 知る-THM+PROG-NPST. 終止

「まさか！この人は何でも知ってるよ！」

係り結びにおいて、焦点は（述語以外の）項ないし付加詞にあり、述語は前提（旧情報）になっている。*m* 語尾終止形が述語として出現できないのは、この形式が新情報を表わす形式だからである、と説明できるのである（より詳しくは下地 2008 参照）。

一方、連体終止形は機能的に無標であり、(31) や (32) のような特徴を持たない。*m* 語尾終止形と連体終止形の 2 形式が対立する過去時制において連体終止形が圧倒的多数を占めるのはこのためである。連体終止形は旧情報を表わしてもよいのだから、係り結びの述語として使えるということになり、実際多用される。希求推量形は、(31) については話者の確信の低いことを積極的に標示するが、(32) の情報価値については新情報も旧情報も表すことができる。よって、係り結びの結びの形式になることができる。

5. おわりに

本稿では、これまで記述がほとんどなかった伊良部島方言の係り結びについて、特に内間の記述 (1) から (3) に照らして記述した。その結果、(1') から (3') の事実を提示した。伊良部島方言の係り結びの共時的な記述から言えることは、係り結び現象そのものが多様であるということである。特に、「排除型の係り結び」はこれまで報告がないタイプの係り結びである。これまでの日本語研究において係り結びはほとんど通時的な研究の対

象でしかなかったが、琉球語のデータを用いれば係り結び研究を共時的あるいは類型論的にも行えるのではないだろうか。本稿で示した「一致型」「排除型」「非呼応型」の単純な類型はその一例である。

注

¹ 本稿では、伊良部島方言の音素分析 (Shimoji 2007) に従い、以下の簡易表記を採用する。長母音、長子音は同一アルファベットの連続を用いて表す。なお、*ɹ* は崎山 (1963) が舌尖 (舌先) 母音と呼ぶ音声実態を有し、音韻的には共鳴音 (*m*, *n*, *v*, *r* の属するクラス) として機能する (この母音の解釈についてかりまた 1986、Shimoji 2006、forthcoming、ペラール 2007 も参照)。*r* はオンセットで [*r*]、それ以外で [*ɹ*] として実現する (例: *turair* [*turaiɹ*] 「取られる」)。

子 音: *p, t, k, b, d, g, f, s, c, z, (h), m, n, v, ɹ (/ɹ/), r (/r/)*

半母音: (*w*), *j*

母 音: *a, i, u, ɪ, (e), (o)*

² 動詞語幹として語尾を取る場合もあるが、生産的に見られるわけではなく、特定の語尾との共起が目立つ (下地 2008)。その詳細な記述については稿を改めたい。

³ 狩俣 (1997) の宮古平良方言の記述によると、平良方言では *=du* と *=ga* の 2 つの対立であるようだ。

参考文献

- 内間直仁 (1985) 「係り結びのかかりの弱まり — 琉球方言の係り結びを中心に」『沖縄文化研究』11:223-244。
- かりまたしげひさ (1986) 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』22(2):73-83。
- 狩俣繁久 (1997) 「宮古方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』東京:三省堂。
- 崎山理 (1963) 「琉球・宮古方言比較音韻論」『国語学』54:6-21。
- 柴田武 (1976) 「沖縄平良市方言の付属語 *du* および *nu, ga* について」佐藤喜代治教授退官記念国語学論集刊行会 (編)『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』東京:桜

風社。

下地理則 (2006) 「南琉球語宮古伊良部島方言」『文法を描く 1』東京：アジアアフリカ言語文化研究所。

下地理則 (2008) 「伊良部島方言の動詞屈折形態論」『琉球の方言』32:69-114。

Shimoji, Michinori (2006) Syllable structure of Irabu Ryukyuan. *Shigen* 2:21-40.

Shimoji, Michinori (2007) Irabu phonology. *Shigen* 3:37-85.

Shimoji, Michinori (forthcoming) Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan. *Gengo kenkyu* 135.

名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』東京：第一書房。

ペラール, トマ (2007) 「宮古方言音韻の問題点」第二回琉球語ワークショップ原稿。京都大学。